

～東国文化から自分の先祖を探る旅～

前橋市立大利根小学校 6年 折茂 謙信

きっかけ

令和2年の8月13日に、祖父の家に行きました。そこで、祖父から一つの土器（資料1）をもらいました。6年生の社会の学習で東国文化の学習をしたと祖父に話をしたら、そう祖父が60年ほど前に、家の近くでたまたま見つけた土器をくれました。この土器を見ていて、自分の祖先がどのような生活をしていたのかについて興味をもち、この土器は、どのようなことに使っていたかについて興味をもち、色々なことを調べてみました。



土器の特ちょう

高さ：約40cm。

直径：約17,5cm。 ※つばの所。

重さ：約3,4kg。

色：黄土色。

円周：約51,5cm。 ※一番太い所

模様：外側は、たて線。

：内側は、横線。

：黒い所や赤い所がある。



上から見た写真



下から見た写真



土器の特ちょう

その他

- 表面がでこぼこしている。
- 小さい石が混じっている。
- 強度が低い。
- たてに長い。
- 逆さにしても立つ。
- ひびやかしている所がある。

調べる



まず、そう祖父が住んでいた藤岡市にある藤岡の歴史博物館に行ってきました。まず、博物館の周りにある竪穴式住居（資料2）や七興山古墳の前方後円墳を見ました。100メートルもある巨大な古墳であり、古墳時代にこの地に巨大な力を持つ豪族が住んでいたことが分かりました。近くにも、白石稻荷山古墳もあり、今と違って政治の中心であった事が想像できます。

予想

藤岡歴史博物館で似ている土器を発見しました（資料3）！！

名前は、「こしき」だと思いました。こしきは、現在の炊飯器です。「こしき」は、底に穴が開いていて、蒸気でコメを蒸す道具です。こしきで、米を蒸して食べていました。「強飯（こわい）」と呼び、現在は、「おこわ」として食べられています。



時代 古墳時代

名前 こしき



江戸時代

かまど



現在

炊飯器

調査 1

この土器が何かを調べてもらうために、群馬県総社町にある前橋教育委員会文化財保護課の前原豊さんにお話を聞きました。

大室古墳群調査担当・ 前原 豊さんの話

この土器の名前は、「カメ」と言い、ご飯を蒸すのに使う道具です。これは、約1200年前にあったものとみられます。これは、7世紀前半くらいで、聖徳太子より少し古いです。古墳時代の終わりから奈良時代の初めにあったものだと思います。土器の見方は、ふっくらしているのが、古墳時代の始めから中ごろくらいで、細長いのは、古墳時代の終わりから奈良時代の始めにつくられています。具体的に言うと、土師器（はじき）という土器で、弥生土器と似ていて、煮たり焼いたりしたりするのに便利です。食器としても使用されていました。

※須恵器は、土師器よりも後で、朝鮮半島から伝わったもので、色や性質が違うので、強度が良いが、今回の土器は、須恵器とは違いました。



古墳時代始めの土器の形



古墳時代から奈良時代の土器の形



黒いところは、空気に当たらずに時間がたった、炭の色だと思われ
ます。



赤いところは、二度焼きをしたこ
ろです。



藤岡市西平井町大神場周辺で発掘された
可能性があるとおっしゃっていました。

結果・感想

祖父の実家の周りは、古墳などの歴史が今でも、盛んに取り入れていて、前橋とは、違うふんいきで、とても楽しかったです。実際にあった土器が、レプリカではなく、本物でよかったです。1200年前にも祖先が住んでいたことが不思議で歴史を感じます。次に、その当時に住んでいた人が気になりました。

調査2 折茂家のルーツを調べる

史跡 上野国分寺跡（こうずけこくぶんじあと）を訪れました。天平13年（741年）聖武天皇は、仏教の力で国をよくしようと考え、国ごとに僧寺（そうじ）と尼寺（にじ）を建立する命令をだしました。上野国分寺もその一つとして現在の高崎市（高崎イオン近く）に建てられました。その後は、次第におとろえていき、14世紀に消滅つしたと考えられている。



当時、一番栄えたこの場所を調べることにより、当時のことが分かったと考えました。現在見られるのは、へいの一部（資料4）と塔基壇（とうきだん）（資料5）がありました。



資料4

築垣と呼ばれ、当時は、寺の四周を囲っていたそうです。1㎡あたり4tの重さがあったそうです。空いている場所には南大門が建っていました。



資料5

基壇と呼ばれ、この上に七重塔が建立され、国分寺の象徴になっていました。1200年前の一部がまだに残っています。



多野郡 (たのぐん) と碓氷郡 (うすいぐん) と勢多郡 (せたぐん) の豪族が国分寺をつくるのに、協力したことが奈良時代の史書「続日本紀」に書かれているそうです。瓦 (かわら) にも寄付をした人の名前がほられていてその中に「織裳 (おりも)」の文字がありました！！！！多野郡の折茂家の先祖がこの時代に生きていたことがわかり、興奮しました。

吉田 (わかた)	多胡 (たこ)	高渠 (たかむそ)
前 (ぬきさき)	酒甘 (さかい)	丹生 (にう)
伎 (そき)	端上 (せのかみ)	有只 (うだ)
新屋 (にいや)	小野 (おの)	抜鉾 (ぬきほこ)
宗 (やまな)	織裳 (おりも)	
因 (ふしゅう)	八田 (やた)	
原 (はやしはら)	小野 (おの)	升茂 (ますも)
前 (おおさき)	尾張 (おわり)	保美 (ほみ)
高 (高山・たかやま)		
倉 (あさくら)	鞍田 (さやた)	田後 (たしり)
	市 (にらつか)	

ミニミニ情報

折茂家の名前の由来

織裳 → 織茂 → 折茂 に変わる

織裳の織は、絹織物

織裳の裳は、布 (ズボン)

※奈良時代の前半に渡来したと多胡の古ひに書かれているとのこと

(祖父情報)

感想

1200 年も昔に存在した名前なので、後世にも伝えていきたいです。今回は、古墳時代までの折茂家について調べたので、これからは、戦国時代や江戸時代の折茂家はどのように生活をしてきたのかを調べていきたいです。

また、更に歴史をさかのぼり、いつから織裳から織茂になり、折茂に変わったのかを調べていきたいです。

土器一つでいろいろなことを調べることができました。土器一つで何でもわかるので、自分もしっかりと何か爪痕を残していきたいです。

この学習を通して土器の偉大さが分かりました。